

格差問題を考える

第1講

格差問題による社会的排除

9/10 (木) 伊藤 泰三 講師 (福祉学科)

第2講

生活に身近な情報量格差

9/17 (木) 朝日 亮太 講師 (経営学科)

第3講

格差を乗り越えるために教育のできること

9/24 (木) 三藤 恭弘 准教授 (こども学科)

第4講

子どもたちの現代的な健康課題

10/1 (木) 中村 雅子 准教授 (健康スポーツ科学科)

第5講

看護格差と地域社会

10/8 (木) 斎藤 公彦 准教授 (看護学科)

平成 27 年度

福山平成大学公開講座

日 時 : 9月10日 (木) ~ 10月8日 (木) 全5講座 18:30 ~ 20:00

会 場 : 福山平成大学7号館大講義室 <http://www.heisei-u.ac.jp/info/map.html>

申込期間 : 8月3日 (月) ~ 9月4日 (金)

申込方法 : 別紙、受講申込ハガキに所要事項を記入の上、郵送または持参

受 講 料 : 無 料

定 員 : 250名

受 講 証 : 5講座中4講座以上の受講者に受講証を授与

申込み問合せ先 : 庶務課

〒720-0001 福山市御幸町上岩成正戸117-1

TEL : (084) 972-5001 FAX : (084) 972-7771

※本学へお越しの際は、公共交通機関もしくは自家用車等をご利用ください。詳しくはHP参照

主 催 : 福山平成大学

後 援 : 福山市 福山市教育委員会 福山商工会議所 府中商工会議所

尾道市 尾道市教育委員会 尾道商工会議所

三原市 三原市教育委員会 三原商工会議所



格差問題を考える

人間の幸せとは一体、何なのだろう。かつての一億総中流から、中流層の崩壊による「格差社会」へ。この格差問題の本質は、単なる経済格差にとどまらず、それに伴う様々な分野での格差問題を抱える人たちが大量に増加したことにあると考えます。今年度の公開講座は、本学の教員による「格差問題を考える」について、講師それぞれの立場から格差問題を提起します。「福祉格差」を伊藤泰三講師から、「情報格差」を朝日亮太講師から、「教育格差」を三藤恭弘講師から、「健康格差」を中村雅子講師から、そして「看護格差」を齋藤公彦講師から計画しました。多くの皆様のご来場をお待ちしております。

第1講 9月10日（木） 格差問題による社会的排除

伊藤 泰三 講師（福祉学科）

近年の長期不況を背景にして、失業や派遣等の不安定雇用の増加に伴い、所得格差が拡大していると言われています。所得の格差は単なるモノの格差だけに留まらず、日常生活や社会活動への参加、社会サービスの利用に大きな影響を及ぼし、通常の社会生活を営めず社会の中で居場所を感じられない状況に陥る事につながっていくでしょう。ヨーロッパではこのような問題を「社会的排除」と呼び、放置しておけば社会の分断を招き、治安の悪化やテロリズムの温床にもなりうる課題として「社会的包摶」と言われる支援が行われています。本講では「社会的排除」の考え方から日本におけるホームレス問題等の排除の現状、日本における「社会的包摶」の現状についてお伝えします。

第2講 9月17日（木） 生活に身近な情報量格差 ~企業・消費者の情報の非対称性~

朝日 亮太 講師（経営学科）

情報は私たちの生活や企業活動に不可欠なものです。情報化社会の進展とともに、情報の有無が生活や企業の利益にこれまで以上に大きな影響を与えるようになっています。そうした中、世の中には情報量の格差（情報の非対称性）が発生しています（例えば、ある製品について、製造企業は製品について性能などを理解している一方で、購入者が十分に理解していることは少ない、つまり、製造企業と購入者間にその製品に関して知っていること（情報量）に差（格差）がある）。こうした情報量の格差は、消費者・企業にとって利益にも不利益にもなります。企業は、様々な仕組みを設けることにより、この格差を減らそうとし、また利用しようとします。この講義では、情報の非対称性のもたらす現象やこうした格差を消費者・企業がどのように対処しているのか、そしてどのように利用しているかについて、具体例を用いながら考えていきたいと思います。

第3講 9月24日（木） 格差を乗り越えるために教育のできること

三藤 恭弘 准教授（こども学科）

大学への進学率と家庭の所得については大きく関係があるということがわかっています。裕福な家庭のこどもは大学（それも上位の大学）に行き、上位の大学を出たために就職も有利に進み、就職が有利に進んだ結果、高い所得を得ることができます。これでは、いつまでたっても社会的な格差は縮まらないことになります。民主的な自由経済社会では、本人の努力や意欲に応じてそれなりの結果が出せる社会であることが求められます。生まれた環境によって違う結果が約束されているということでは、「教育の機会均等」の精神が十分反映されていないと言えるでしょう。様々な家庭環境がありつつも、それぞれのこどもたちに「自らの描く未来」を実現していく能力を育していくため、家庭や学校にどんな役割が期待されるのか、一緒に考えてみたいと思います。

第4講 10月1日（木） 子どもたちの現代的な健康課題 ~格差社会との関わりも含めて~

中村 雅子 准教授（健康スポーツ科学科）

子どもたちの心や身体の健康課題は、子どもたちを取り巻く社会環境や生活環境の大きな影響を受けています。衛生状況や栄養状態の悪い時代には、トラコーマなどの感染症や栄養不良等が増えましたが、現在疾病率がトップであるような、虫歯や視力の1.0未満の子どもは多くありませんでした。また、近年急増しているアレルギー疾患の子どもたちについても、環境汚染や食生活等が複雑に関わっているのではないかとも言われています。虫歯については、年々罹患率も減少し治療率も上がってきていますが、その中で数パーセントの子どもについては、家庭の状況から全く治療されないまま、放置されている子どもの実態もあるようです。社会や家庭の格差から見えてくる子どもの健康課題に目を向け、お話したいと思います。

第5講 10月8日（木） 看護格差と地域社会

齋藤 公彦 准教授（看護学科）

現代の日本社会において、地域による医療格差の問題が多く取り上げられており、実際に山間地区や僻地では医師不足や看護師不足との声がよく耳にします。しかし、厚生労働省などのデータによると、人口に対する看護師数については都心のほうが多いと挙げており、これは単純に数値上で比較した事で、実際の看護師を必要としている人々に対してではありません。ただ、医療や看護に対し様々なニーズがある中で、特に在宅医療への移行時期である現在において、看護の役割と活用方法が重要となってきており、この格差を行政主導でなくすることは、ほぼ不可能であると考えます。そのため、看護格差をなくしていくためには、地域住民等の看護を必要としている人達が、知識を身に付け、活用方法を考えていけるようになる以外、地域社会における看護格差がなくなる又は小さくなっていく事はないと考えます。そのため、具体的な内容を用いながら一緒に考えていきたいと思います。